

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の2年目)

1. 研究課題

環境問題の社会史的研究

Studies on the Social History of Environmental Problems

2. 研究代表者氏名

岩城 卓二

Iwaki Takuji

3. 研究期間

2020年4月-2023年3月(2年目)

4. 研究目的

日本の近世は、生産・生活の場の拡大と、天然資源の獲得のために山野河海を切り開く大開発の時代であった。開発による諸産業の勃興は経済的発展をもたらしたが、他方でそれらに起因する環境問題が発生し、社会問題化していたことは、各地に残される近世史料から知られる。しかし、その多くは一地域内の問題に止まり、環境問題が人の健康や生活環境に関わる公害として大きな社会問題となるのは1950年代以降のこととされる。近世以降、人々は環境問題に対してどう向き合ってきたのか。そこで本研究班では、日本の近世から現代までの環境問題について、とくに環境問題に対する民衆運動・社会運動に注目し、運動が起こった現場の社会構造をふまえて環境問題を考えていきたい。あわせて、世界で発生した環境問題をめぐる民衆・社会運動と比較検討し、被害の現場に生きる住民にとって環境問題とは何かを明らかにしていく。

Early modern Japan was an era of great development but also saw an expansion of production and human living space that resulted in the devastation of nature. Although the rise of various industries brought economic growth, historical sources show that it also caused various environmental problems which are now also recognized as social problems. However, most problems did not spread beyond local communities until the 1950s, when they finally began to be recognized as serious social crises, called *kōgai*, which critically affected public health and destroyed the living environment. How, then, have people confronted such issues throughout history? This research project will explore various environmental problems from the early modern period through to contemporary times, focusing on the social movements and social structures that framed them. We also plan to

compare environmental problems in Japan with those encountered in other countries, aiming to clarify the significance and meaning of such problems for the people living with disaster.

5. 本年度の研究実施状況

本年度も昨年度に引き続き歴史学を中心に文化人類学・社会学・哲学など多彩な研究者が参加し、17回の研究会(オンライン/内2回は書評会)を開催した。報告はすべて録画し、報告者の許可を得た上で、視聴を希望する班員にデータを提供した。本年度は当初の予定通り歴史学・文化人類学の実証的研究報告を中心に研究会を開催した。環境破壊を問題化したケースだけでなく、山野河海を活かしたヒトの生きる力について焦点をあてた研究報告が多く、今後の研究班の方向性としては、必ずしも社会問題化したケースにこだわることなく、生きる力について議論を深めていく予定である。なお研究班のもう一つの柱である史料整理と古文書解読会は、対面式の実施が困難であったため、本年度も開催できなかった。

6. 本年度の研究実施内容

2021-04-03 書評会：藤野裕子著『民衆暴力』 藤野裕子著『民衆暴力 一揆・暴動・虐殺の日本近代』 発表者 松村圭一郎 岡山大学文学研究科 藤野裕子『民衆暴力』『都市と暴動の民衆史』を読む 発表者 藤原辰史

2021-04-26 道意新田の環境史—耕作地の「維持管理」に注目して— 発表者 河野未央 尼崎市立地域研究史料館あまがさきアーカイブズ

2021-05-10 高度成長期日本の原子力政策—軽水炉導入と核燃料サイクルの追求 発表者 小堀 聡

2021-05-24 「私たち、“カオス”ですが、なにか？」が意味するもの——原子力施設反対運動における暴力問題と運動の正当性 発表者 青木聡子 名古屋大学環境学研究科

2021-06-07 「ウラニウム」から「八郎潟干拓」へ—秋田の作家・伊藤永之介の見た東北の開発 発表者 藤原辰史

2021-06-21 斎藤幸平『人新世の「資本論」』 斎藤幸平『人新世の「資本論」』を読む 発表者 佐藤淳二 斎藤幸平『人新世の「資本論」』 コメンテーター 藤原辰史

2021-07-17 環境依存型社会のレジリエンスと脆弱性：東南アジア流域社会の調査から 発表者 石川 登 東南アジア地域研究研究所

2021-07-29 被爆者運動と主体形成—初期被団協運動を中心に 発表者 直野 章子

2021-09-08 EHAEH(東アジア環境史学会)2021 Environmental problems in Japan : What kind of damage has become an environmental problem? Environmental problems in pre-modern Japan 発表者 岩城卓二 Mine Pollution and Health Issues in Modern Japan: Acknowledgment and Denial 発表者 Cyrian Pitteloud EHES Paris Gary Snyder' s Search for Green Religion in Japan' s New Left around and after 1968 発

表者 Till KNAUDT

2021-10-11 交通事故の環境史：「環境」としての自動車 発表者 瀬戸口明久

2021-10-25 イワシ・ニシンの江戸時代 発表者 武井弘一 琉球大学国際地域創造学部

2021-11-08 ダークコモンズとエッジワークから考える西部戦線、沖縄、水俣 発表者 田中雅一 国際ファッション専門職大学

2021-11-22 和牛の歴史－歴史叙述の方法論をめぐって－ 発表者 板垣貴志 島根大学法文学部

2021-12-13 なぜ銅山による環境破壊は繰り返されたのか：日本近世における環境問題 発表者 岩城卓二

2021-12-18 石見銀山附幕領の年貢割付状 発表者 鎌谷かおる 立命館大学食マネジメント学部 笹ヶ谷銅山における紺青・緑青拾い 発表者 岩城卓二

2022-02-21 琵琶湖を取り戻せ 発表者 東 幸代 滋賀県立大学人間文化学部

2022-03-28 近世日本の気候変動研究序説 発表者 高槻泰郎 神戸大学

7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

8. 研究班員

所内

岩城卓二、石井美保、KNAUDT, Till、小関隆、小堀聡、瀬戸口明久、直野章子、高木博志、平岡隆二、福家崇洋、藤原辰史

学内

Andrea Flores Urushima(京都大学 東南アジア地域研究研究所)、石川 登(京都大学東南アジア地域研究研究所)、ERICSON Kjell David(京都大学学際融合教育研究推進センター)、米家泰作(京都大学文学研究科)、森口(土屋)由香(京都大学人間・環境学研究科)、山越言(京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科)

学外

青木聡子(名古屋大学環境学研究科)、井黒忍(大谷大学)、池田さなえ(大手前大学)、市川秀之(滋賀県立大学)、Holca Irina(東京大学大学院総合文化研究科)、岡安裕介(NPO 法人京都アカデミア)、鎌谷かおる(立命館大学)、唐澤太輔(秋田公立美術大学大学院)、河野未央(尼崎市立歴史博物館あまがさきアーカイブス)、河島裕子(尼崎市立歴史博物館あまがさきアーカイブズ)、斎藤幸平(大阪市立大学経済学研究科)、Cyrian Pitteloud(EHESS (パリ))、佐野静代(同志社大学)、関礼子(立教大学)、高久智広(関西大学)、高橋美貴(東京農工大学)、武井弘一(琉球大学)、田中雅一(国際ファッション専門職大学)、友松夕香(愛知大学)、沼尻晃伸(立教大学)、朴美貞(立命館大学)、橋本道範(滋賀県立琵琶湖博物館)、松嶋健(広島大学大学院)、松村圭一郎(岡山大学大学院)、松本望(尼崎市立歴史博物館あまがさきアーカイブス)、落合功(青山学院大学経済学部)、高槻泰郎(神戸大学経済

経営研究所)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数				延べ人数					
		総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)		17	3	1	1	0	138	24	19	13	
		(4)	(1)	(1)	(1)	(0)	(48)	(7)	(14)	(7)	
国立大学		7	1	0	0	0	51	3			
		(2)	(1)	(0)	(0)	(0)	(18)	(3)			
公立大学		3	0	1	1	0	5	0	3	3	
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)			
私立大学		10	1	0	0	0	41	5			
		(5)	(1)	(0)	(0)	(0)	(19)	(0)			
大学共同利用機関法人		0	0	0	0	0	0				
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)				
独立行政法人等公的研究機関		5	0	0	0	0	23				
		(3)	(0)	(0)	(0)	(0)	(19)				
民間機関		1	0	0	0	0	6				
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)				
外国機関		1	1	0	0	0	2	2			
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)					
その他 ※		0	0	0	0	0					
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)					
計	0	44	6	2	2	0	266	34	22	16	0
		(14)	(3)	(1)	(1)	(0)	(104)	(10)	(14)	(7)	(0)
※「その他」の区分受入がある場合 具体的な所属等名称を記載：例) 高校教員 無所属の場合は機関数0とカウントし、この欄の記載不要											

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	7			
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	0			
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	18			
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0			
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0			

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

雑誌名	掲載論文	掲載年月	論文名	発表者
福知山市 2021 年度実習 旅行報告書	1	R4. 1	消えたアカマツー岡 崎文彬のアカマツ林 調査	<u>米家泰作</u>
月刊みんぱく	1	R4. 2	焼き畑から見た日本	<u>米家泰作</u>
丸山康司・西 城戸誠編『ど うすればエネ ルギー転換は うまくいくの か	1	R4. 3	世代間公正と世代内 公正の相克ー『石炭 委員会』の模索	<u>青木聡子</u>

雑誌名	掲載論文	掲載年月	論文名	発表者
平井健介・島西智輝・岸田真編『ハンドブック日本経済史』－徳川期から安定成長期まで	1	R3. 12	エネルギー革命と公害－技術革新と住民運動	小堀聡
K	1	R3. 9	湖と田んぼのネットワーク	<u>市川秀之</u>
近江学	1	R4. 3	宮座と当屋制	<u>市川秀之</u>
イワシとニシンの江戸時代	1	R4. 2	畿内の肥料取引と農村	<u>高槻泰郎</u>
環境社会学研究	1	R3. 12	法廷を鏡にして社会学を考える－福島原発事故避難者訴訟の事例から－	<u>関礼子</u>
判例時報	1	R4. 1	農村のことは先ず農民自らに聴かねばならぬ	<u>関礼子</u>
公害スタディーズ	1	R3. 10	食べる／新潟水俣病	<u>関礼子</u>
奪われた暮らし	1	R4. 3	ふるさと疎外・損傷・剥奪／目の前の避難者に等しく向き合う社会正義／福島原発事故へのコンパッション	<u>関礼子</u>

雑誌名	掲載論文	掲載年月	論文名	発表者
Translation Studies: Retrospective and Prospective Views	1	R3. 12	Minor Exchanges: Romanian Anthologies of Translated Japanese Poetry Published during the Last Decades of the Communist Regime	<u>ホルカ イリナ</u>
Japanese Studies	1	R3. 12	Sawako Nakayasu Eats Sagawa Chika: Translation, Poetry, and (Post)Modernism	<u>ホルカ イリナ</u>
欧文 ZINBUN	1	R4. 3	Real Animals and Where to Find Them: in the Works of Shimazaki Tōson and Shiga Naoya	<u>ホルカ イリナ</u>
山口県史研究	1	R4. 3	明治十年代の十州塩田同盟と防長塩田ー明治十一年四月ー十四年六月	<u>落合功</u>
青山経済論叢	1	R3. 12	水産諮問会の開催と塩業会	<u>落合功</u>
青山経済学論集	1	R3. 9	鈴木藤三郎と岡田良一郎	<u>落合功</u>
青山経済論叢	1	R3. 6	近世初期入浜塩田の存在形態ー播磨国荒井浜を中心にしてー	<u>落合功</u>
アレ	1	R3. 11	「食べること」と「信じること」	藤原辰史
ポストコロナの生命哲学	1	R3. 9	ポストコロナの生命哲学	藤原辰史

雑誌名	掲載論文	掲載年月	論文名	発表者
歴史と民俗	1	R4	消費から漁撈を考える－琵琶湖のフナズシの洗練化をめぐる	橋本道範
文化人類学	1	R3.9	「止まった時間」を生きる：学校事故をめぐる倫理的応答の軌跡	石井美保
Current Anthropology	1	R3.11	The Code of Pangolins: Interspecies Ethics in the Face of SARS-CoV-2	石井美保
菅能の人類学：感覚論的転回を超えて	1	R4.3	序章	石井美保
菅能の人類学：感覚論的転回を超えて	1	R4.3	ゾーエの海に身を浸す：妖術者と女性司祭のセクシアレティと官能性	石井美保

本年度 共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

研究書の名称	編著者名	発行年月	出版社名
自然・生業・自然観－琵琶湖の地域環境史－	橋本道範	R4.2	小さ子社
菅能の人類学	石井美保他	R4.3	ナカニシヤ出版

11. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

対面式研究会と史料解説会が開催できなかったため、研究費はほとんど使用していない。

12. 次年度の研究実施計画

研究実施計画最終年度となる2022年度は、2021年度と同じく、月2回(8～9、1～2月除く)のペースで研究会を開催する。4～7月は、歴史学・文化人類学を中心とした具体的事象に基づく個別研究報告、10月以降は、未報告班員の研究報告を予定している。2022年度は2020・2021年度の成果をふまえ、前近代人の自然観、開発と自然災害の因果関係、生業と環境問題についての検討を深めるとともに、ヒトの生きる力が近代化においてどのように変化していくのかについて、日本と世界の諸国・諸地域の事例と比較しながら検討していきたい。また、COVID19の感染状況が改善されれば、当初の計画通り、環境問題が社会問題化する背景や争論・訴訟の内容が知られる近世・近代史料の収集や、公害問題の現場の調査も行う予定である。

13. 次年度の経費

		開催回数	国内出張旅費(延べ人)	支出予定額
国内旅費	研究会参加費	10	30	300000
	一般旅費			
海外旅費	渡航旅費			
	招へい旅費			
謝金(講演謝金、研究協力者金、その他の謝金)				50000
消耗品等経費				50000
その他				
合計				400000

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

班員各自が、研究班における個別研究報告・討論の成果を研究論文として公表するとともに、研究班の活動性をまとめた論集刊行の準備を進める。